

メディア暴力の倫理学（X） ーメディア暴力と哲学的行為論ー

松川 俊夫

メディア暴力規制を論ずるに当たっては、「暴力行為」の定義が重要になるだけでなく、現代の哲学的行為論の知見によって（メディアに関連する）暴力行為を分析することも不可避な作業となる。本稿では、アンスコム¹の行為論に依拠し、彼女の「意図的行為の記述依存性」「行為の再記述説」等のアイデアを援用して「暴力行為」及び「暴力行為の意図・動機」の分析を実施し、メディア暴力規制のための基礎的な議論を提示する。

本稿では、「メディア暴力」に関する問題を議論するに際して、そのような議論を展開する上で基礎となる事項に焦点を合わせたい^{*1}。具体的には、「暴力行為（violence）」を「アンスコム¹の行為論」の下で論考し、メディア暴力規制に関する議論とこの「哲学的行為論」がどのように関連するのかを概観したい。なお、「メディア暴力」とは、本稿に於いては、映画、DVDソフト、地上波・衛星波もしくはケーブルによる放送、更には、インターネット配信の動画コンテンツに映し出された暴力描写のことであると理解してさしつかえない。また、本稿では「判断能力のある成人」による暴力描写の鑑賞のみを念頭に置いている。

§ 1. 暴力行為の定義

日常会話では、「暴力行為（violence）」という言葉の意味としては、「乱暴な力をふるうこと」程度で十分だろう。しかし、メディア暴力の規制に関する議論を展開する際には、「暴力行為」という言葉がある程度、厳密に定義しておく必要が出てくるのであり、メディア暴力を研究対象とする発達心理学者、社会心理学者らは実際に、次のように「暴力行為」を定義している。

「人に、物理的、心理的危害を直接的、間接的に与える行為や、人間以外の生物や物を傷つけたり壊したりする行為」^{*2}。

「物理的力の公然とした現れ。武器の使用・不使用は無関係であり、対象となるものは自己、他者を問わない。傷つけたり、殺したりすると脅してある人に意志に反する行為を強要したり、実際に傷つけたり殺したりすること (the overt expression of physical force, with or without weapon, against self or other, compelling action against one's will on pain of being hurt or killed, or actually hurting or killing.)」*3。

通常、「暴力行為」「暴力」と訳される英単語は、‘violence’である。しかし、「攻撃」と訳される‘aggression’や「反社会的行動」と訳される‘antisocial behavior’も、「暴力」という日本語の方が訳語として相応しいと思われることがしばしばである。

‘aggression’の定義の代表例は次のようなものである。

「他人を害したり、怒らせたりする行為 (an act that injures or irritates another person.)」*4。

また、‘antisocial behavior’の定義の例としては、次のものを挙げておく。

「心理的もしくは物理的に他の人あるいは他の人々に対して有害である行動。意図的な行動であるか否か、成功した行動であるか否かは問わない (that which is psychologically or physically injurious to another person or persons whether intended or not, and whether successful or not.)」*5。

さて、W.J.ポッターは「暴力行為」の定義を吟味し、「意図性 (intentionality)」と「危害 (harm)」の二つを暴力の重要な構成要素であるとしている。以下に引用するポッターによる定義は哲学的に極めて興味深いものである。

「暴力行為とは、キャラクター（登場人物）の身体的もしくは感情的に調子のよい状態を侵害することである。暴力行為は重要な構成要素を二つ持つ。意図性と危害である。この二つのうち、少なくとも一つが存在していなくてはならない (Violence is a violation of a character's physical or emotional well-being. It includes two key elements - intentionality and harm - at least one of which must be present.)」*6。

「人間」「ひと」と言わず、「キャラクター」という語を用いるのはメディア暴力を念頭に置くなら、妥当なことである。言うまでもなく、テレビや映画には、ディズニー映画でおなじみのミッキーマウスやドナルドダック等、様々な人間以外のキャラクターが登場する。さて、ポッターは「少なくとも一つ」との限定を入れているが、「意図性」も「危害」も共に、「暴力行為」の不可欠な構成要素と考えるのが一般的であると思われる。特に、「危害」については、「身体的もしくは感情的に調子のよい状態を侵害すること」と「危害」を加えることとはほぼ、同義ではないかとの指摘もできよう。ただし、「危害」と類似した概念に「不快 (offense)」もあり、「危害」を加えることとまでは言えないものの、「不快」をもたらすことではある「身体的もしくは感情的に調子のよい状態を侵害すること」はありそうである*7。

§ 2. アンスコム的行為論

さて、「意図性」を欠く「暴力行為」が存在するのか否かは、問題である。「津波」や「豪雨」を「自然による暴力行為」と言うこともできようが、これは単なる「擬人化」であると思われ、自然現象そのものには意図はない。自然は暴力行為をふるわないのである。むしろ、意図性を欠く暴力行為としては、次のような例に着目すべきである。子どもの頭をなでることが暴力行為であると思う者は、日本にはあまりいない。しかし、子どもの頭をなでることが暴力行為以外の何ものでもない文化圏は現実に存在する。ある人が子どもをほめたつもりで頭をなでたのに、周りの人々から暴力行為、それも「霊的な」暴力行為を行っているといふと非難されることはあるであろう。この場合は多くの問題を孕むとはいえ、「意図性を欠く暴力行為」を行ったのだと、一応は言えるのかもしれない。

また、ボクシング、レスリング、柔道といった格闘技やラグビー、サッカー、アメリカンフットボールといった球技、更にはフェンシングや剣道といった競技についてもそれをスポーツであると認知しない人々が、それらの競技のプレイを暴力行為であると思うのかもしれない。それにもかかわらず、それらのスポーツのプレイヤー自身は対戦相手の「身体的もしくは感情的に調子のよい状態を侵害すること」を行っているとは決して思っていない。むしろ、もしそう思って行われるプレイがあったとしたら、そのプレイはおそらく、(その競技での)「反則」となるはずである。この場合も、或るスポーツをスポーツとしてとして認知しない人々にとっては、そのスポーツのプレイヤーたちは「意図性を欠く暴力行為」を行っていると思えるのだろう。

「行為」や「意図」「意図性」を巡る問題に行き当たったところで、援用すべきは現代の「哲学的行為論」である。

アンスコムは、彼女の著作『インテンション』^{*8}等で「哲学的行為論」を論ずる際には決して無視できない議論の基本的枠組みを提示している。この枠組みはアンスコムと「行為の因果説」を巡っては相対する立場にあるドナルド・デイヴィッドソン^{*9}も援用しているものであり、その枠組みは次の引用によく示されている。

「アンスコムは、(1)行為が意図的か否かがその行為の記述に依存することの観察から(意図的行為の記述依存性・「記述のもとでの意図性」)、(2)行為と記述を一貫して明瞭に区別した上で(行為と記述の区別)、(3)行為はさまざまな仕方でも再記述されると考えた(行為の再記述説)」^{*10}。

(1)の「意図的行為の記述依存性」は、「意図性を欠く暴力行為」が実は「意図的な暴力行為」であることをうまく説明する。子どもの頭をなでた人は、「子どもをほめる」という意図をもってその行為を行ったと記述され、「子どもに霊的な危害を加える」という暴力行為を意図的に行ったとは記述されない。彼・彼女の行為が「意図的に子どもに霊的な危害を加える」と見なされることはあるであろうが、その場合は、「誤解(意図的であることについて)」と「過失(自分の文化圏では問題ないが、他の文化圏では「暴力行為」と見なされることを行ったという)」が生じているのである。

また、ボクシングの競技者にとってパンチを繰り出すのは勝利条件を満たそうとする意図によってであって、対戦相手の「調子のよい状態を侵害する」こと、つまり暴力行為を意図的に行っているとは(競技者本人にとっては)記述されないのである。

ただし、ボクシングを知らない人にとってはボクサーのパンチは「意図的な暴力」であると「誤解」されるかもしれない。

ここで問題は、意図的でないとして記述される暴力行為を「真性の」暴力行為として認めるべきか否かである。意図的ではないとして記述される暴力行為は、「真性の」暴力行為ではなく、不幸な「過失」として捉えるべきではないか。そして、「過失」も暴力行為に含まれるか否かは、「言葉の使い方の約束」の問題であると考えられる。少なくとも、意図的であると記述される暴力行為は、意図的ではないとして記述される暴力行為とは明確に区別される行為であることは否定できない。よって、以後、本稿では、意図的ではないとして記述される暴力行為は「真性の」暴力行為ではないという立場を取り、意図的であると記述される暴力行為を議論の中心に据えることとする。

上記の「行為論の基本的枠組み」を念頭に置き、次にメディア暴力がもたらすとされる影響について論じる。

§ 3. メディア暴力の影響

メディア暴力がもたらす影響として、次の四つがよく挙げられてきた^{*11}。

- (1) カタルシス効果 (catharsis effect)
- (2) 攻撃者効果 (aggressor effect)
- (3) 犠牲者効果 (victim effect)
- (4) 傍観者効果 (bystander effect)

「カタルシス効果」とは、メディア暴力を鑑賞することにより、「欲求不満が解消する」という効果である。上記の四つのうち、この効果だけは良い影響であるのだが、今日ではこのカタルシス効果の存在を否定する見解の方が有力だ。

「攻撃者効果」とは、メディア暴力に長く接した者は、暴力を振るうことに対する抑制が弱くなり、暴力を頻繁に振るうようになるという効果である。攻撃者効果は、メディア暴力の悪影響の代表例とされ、盛んに研究されてきたが、ニューヨーク州でイーロン^{*12}等が行ったものが極めて有名である。また、この効果については、短期的な影響と長期的な影響の二つがあるとされる。短期的なものについては年齢を問わずに現われるとされ、長期的なものについては、幼児に対するものが重要視されており、幼児期にメディア暴力に多く接した者は年を取った後も攻撃的になる傾向にあると指摘されている。メディア暴力の悪影響として一番重要視されてきたものは、この「攻撃者効果」である。

「犠牲者効果」は、「カルティベーション効果」とも呼ばれ、メディア暴力に多く接していると、現実社会は暴力に溢れているように感じられ、必要以上に暴力に対する恐怖心・対抗心を持つようになるというものである。この効果の研究の中では、ガーブナー^{*13}のものが有名だ。「傍観者効果」とは、メディア暴力に多く接していると、「脱感作 (desensitization)」をおこし、暴力に慣れきってしまい、現実の暴力を目の前にしても、傍観者として平然としていられるようになるというものである。なお、「犠牲者効果」と「傍観者効果」とは「攻撃者効果」を強化すると言われることが多い。そのことも案配し、本稿では、もっぱら攻撃者効果を取り上げていくこととする。

ここで、特に「攻撃者効果」について指摘したいことは、メディア暴力を鑑賞した

人間が暴力的になる機序 (mechanism) の神経生理学的研究もなされているが、現在のところ、主に主張されているのは、メディア暴力を鑑賞することと攻撃的になることとの間に「正の相関関係」が成り立つということである。

無論、「正の相関関係」の指摘は、メディア暴力行為を見ることと攻撃的になることとの間に成立するであろう何らかの「因果関係」を前提としていると考えられる。しかし、このような因果関係の成立・不成立に関しては様々な要因 (メディア暴力が鑑賞される脈絡、鑑賞者のその時の心的状態等) が関与するであろうことは疑い得ない。メディア暴力を鑑賞することと攻撃的になることとの間に単純な形で因果関係が成り立つと主張されているわけではないのである。

§ 4. 暴力行為の理由

行為に関しては、その「理由」や「原因」に関する重要な哲学的議論がある。まずは、暫定的に、行為についてはその「理由」を提示することがその「行為の理解」のために不可欠である、との立場に立って議論を進めよう。このような考え方については様々な議論がなされてきたものの、この考え方が現代の哲学的行為論で最もポピュラーな立場であることは否定できない。先のアンスコム の 枠組みによると、行為の「理由」もまた、行為を「再記述」して得られるものである。

以下の引用も、アンスコム の「行為の理由」に関する基本的考え方をうまく提示していると思われる。

「アンスコムによると、行為の理由として適格なものは次の三種類がある。

- (a) 過去志向型動機：過去の出来事に言及する
「なぜ彼を殺したのか？」—「彼が父を殺したからだ」
- (b) 動機一般：解釈的観点を与える
「なぜ彼を殺したのか？」—「恐怖心からだ」
- (c) 未来志向型動機：未来の出来事に言及する (=未来志向的意図)
「なぜ彼を殺したのか？」—「有名になるためだ」*¹⁴。

さて、(a)の過去志向型動機及び(c)の未来志向型動機と(b)の動機一般とが異なったタイプに属することは自明である。動機「一般」という言葉からも分かるように、(a)の過去志向型動機及び(c)の未来志向型動機は、(b)の動機「一般」と比して、より具体的な動機なのである。

メディア暴力によって描写される暴力行為は、ドラマ等の場合は当然、作り物なのではあるが、一般には(a)や(c)の形で記述されるであろう。肉親を殺害した相手に復讐したり、遺産を相続するために配偶者を殺害するドラマのシーンは、作り物とはいえ、それぞれ、(a)の過去志向型動機を示す形での暴力行為として記述されたり、(c)の未来志向型動機を示す形での暴力行為として記述されるであろう。

これに対して、メディア暴力の影響として行使される暴力行為については全く状況が異なる。メディア暴力の影響として行使される暴力行為は例えば、「他人に危害を加えることを抑止する力が弱くなったから」といったような動機一般を示す形での暴

力行為として記述される^{*15}。そして、その行為がメディア暴力の影響下で行使されたことを強調して記述される際には、(a)の過去志向型動機を示したり、(c)の未来志向型動機を示す形で再記述されることは一般的ではない。残酷なシーンを多く踏む所謂「スプラッター映画」が特に未成年者の暴力行為を誘発したのではないかと、ということが何度も指摘されてきたが、スプラッター映画が誘発したかもしれない個々の暴力行為が、(a)の過去志向型動機を示したり、(c)の未来志向型動機を示す形で再記述されることはまず、なかったのである。

以上をまとめると次のようになる。メディア暴力に描写された暴力行為を暴力行為Sとし、メディア暴力の影響を受けたとされる人物が行使した暴力行為を暴力行為Tとする。暴力行為Sは、(a)の過去志向型動機もしくは(c)の未来志向型動機を記述することによって「理解」されるのが通常であろう。無論、暴力行為Sは「作り物」であるかもしれないのだが、そのことはここでは問題とならない。それに対して、暴力行為Tをメディア暴力の影響下で行使されたことを記述しようとする、(b)の動機一般を再記述することによって理解するしかないのである。確かに、暴力行為Tについても(a)の過去志向型動機もしくは(c)の未来志向型動機を再記述することによって理解することは可能であろう。しかし、その場合、その暴力行為の動機一般がメディア暴力による影響であることは、記述から基本的に省かれてしまうのが通例なのである。メディア暴力によって描写された暴力行為Sとメディア暴力の影響下で行使された暴力行為Tが、異なったタイプの動機、より具体性を欠く動機である「動機一般」によって理解されることは看過できないのである。この点をより明確にするため、次の例を考えてみよう。

例1 前夜、ギャングが裏切り者をリンチするシーンを含むDVDソフトを鑑賞した男が、次の日、貸した金をいつまでも返さない知人に殴る、蹴るの暴行を加えた。この暴力行為の理由として次の二つの記述が得られるとする。

- (1)「なぜ、彼は知人に暴行を加えたのか」－「借金を踏み倒されたからだ」。
- (2)「なぜ、彼は知人に暴行を加えたのか」－「前夜のメディア暴力鑑賞の結果、抑制力を欠いていたからだ」

なお、前夜のメディア暴力で描写された暴力行為（演技ではあるが）の理由は次のように記述されるものであった。

- (1)′「なぜ、ギャングは男に暴行を加えたのか」「仲間を裏切ったからだ」。

(1)及び(1)′が(2)と異なったタイプの動機を記述するのは容易に見て取れるであろう。そして、メディア暴力の影響下で行使された個々の暴力行為も暴力行為である以上は、(a)の過去志向型動機を示したり、(c)の未来志向型動機を示す形で再記述が可能になるのであるが、そのように再記述される際にはその暴力行為がメディア暴力の影響であるということは、再記述から基本的には抜け落ちてしまう^{*16}。この点に於いて、(b)の動機一般を示す行為の記述が、「解釈的観点を与える」と銘打たれていることは極めて説得力がある。ここでは、メディア暴力の影響によって生じた動機一般が問題となり、暴力行為について発達心理学や精神医学等の知見に基づく解釈的観点が与えられているのである。

§ 5. 暴力行為の規制

先の「例1」を暴力行為の防止ということから更に考察してみよう。「例1」の場合、このような暴力行為を防止するために、次の二つの防止策のうち、どちらを優先させるべきであろうか。

防止策Ⅰ 貸した金を平和的に取り戻す法的システムを構築し、それに従わない者にはペナルティーを科す。あるいは、借りた金を返せそうもない者について金を貸すことを禁止する規則を設ける。

防止策Ⅱ メディア暴力規制を強化する。

この問いへの解答は明らかで、防止策Ⅰよりも防止策Ⅱを優先させよ、と主張する人はまずいないのである^{*17}。暴力行為の防止については、より具体的な動機を得られる暴力行為の記述に関することを優先して規制するのは合理的である。「動機一般」についての、暴力行為の記述に関する規制は当然、規制そのものも一般的になる、つまり、具体性を欠く規制となる^{*18}。

先に、メディア暴力を鑑賞することと攻撃的になることとの間に「正の相関関係」が成り立つ、ということに言及した。問題は、「どのくらい強い」正の相関関係が成り立つのか、ということである。喫煙することは肺ガンになることの必要条件ではないけれども、喫煙と肺ガンとの間には強い相関関係が認められている。そして、このことは、例えば、「(全ての人について) いかなる場所でも禁煙強制」は無理としても、「(全ての人について) 公共の場での禁煙」の論拠となっている。つまり、喫煙と肺ガンとの間に成り立つ相関関係は強ければ強いほど、喫煙について強い規制をすることの論拠となるのである。それで、メディア暴力を鑑賞することと攻撃的になることとの間には、喫煙と肺ガンとの間に認められているような強い相関関係を認めることができるか否か、が問題になる。強い反論もあるものの、認めることができるという見解が現在では主流となりつつあるようであるが^{*19}、本稿では即断を避けたい。ただし、いかなる鑑賞者、いかなるメディアについても暴力描写を全面的に禁止するに足る程の確固たる研究成果、関連する様々な要因を的確に処理した研究成果は少なくとも現在のところ、提示されていないようにも思える。

したがって、以上の事情を配慮し、アンスコム の行為論に依拠すると、メディア暴力の影響下で行使されたと認められる暴力行為についても、より具体的な動機である過去志向型・未来志向型動機を言及するように再記述し、その再記述に沿った形でなされる規制を優先するのが合理的である。現在の状況では、メディア暴力の全面禁止までは正当化できない。

§ 6. 結び

本稿では、アンスコム の行為論の枠組みではメディア暴力の規制は強い制限を受けることを示した。次の課題は、アンスコム の行為論のライバルである「デイヴィッドソンの行為論」ではメディア暴力の規制はどのように理解されるのか、を示すことである。

-
- * 1 なお、本稿で扱ったテーマは次の拙論文でより包括的に論じられている。「スクリーン暴力と哲学的行為論」『思索第45号』（東北大学哲学研究会）、2012年。
 - * 2 佐々木輝美『メディアと暴力』勁草書房1996年、p. 92。
 - * 3 Gerbner, G. et al., 'Cultural Indicators : Violence profile No.9,' Journal of Communication, 28(2), 1978, p.179.
 - * 4 Eron, L. D., 'The development of aggressive behavior from the perspective of a developing behaviorism,' American Psychologist 42, 1987, p.435.
 - * 5 Greenberg, B. S. et al., 'Content analysis of U.S. TV drama,' in Greenberg, B. S.(ed.), "Life on television," Abelx, 1980, p.102.
 - * 6 Potter, W. J., "On Media Violence," Saga Publications, 1999, p.80.
 - * 7 本稿では、「不快」についてはこれ以上言及しない。議論を「危害」に限ることとする。ただし、(幾つかの拙論で何度か指摘してきたように)「不快」は「危害」よりもより主観的であることと、このことがメディア暴力規制にも関わってきて、「不快」については「危害」よりもより弱い規制しか正当化されないことの二点はここでも指摘しておきたい。
 - * 8 Anscombe, G. E. M. , "Intention", Harvard University Press, 2000.
 - * 9 Davidson, D., "Essays on Actions and Events," Clarendon Press, 2011等.
 - * 10 河島一郎「行為の一般性と個別性 ―デイヴィッドソンはアンスコムとどこで分かれたのか」『東京大学教養学部哲学・科学史部会 哲学・科学史論叢第八号』2006年 p. 48。
 - * 11 拙論文「テレビ暴力について」『モラリア第7号』（東北大学倫理学研究会2000年）等を参照のこと。
 - * 12 Eron, ibd..
 - * 13 Gerbner, ibd..
 - * 14 河島 ibd., p.57.
 - * 15 アンスコムの行為論の枠組みではおそらく、暴力行為の「動機一般」の生起を精神医学等の視点から見て「因果的に引き起こす」ということまでしか主張できない。
 - * 16 一言で言えば、メディア暴力の影響は動機一般の問題であり、過去志向的動機・未来志向的動機の問題ではないのである。
 - * 17 ただし、メディア規制が全く効果のないことである、というわけでもない。
 - * 18 将来、神経心理学的機序の解明が進み、メディア暴力の鑑賞がどのような条件の下でどのような鑑賞者に対してどのような影響を及ぼすのかということが（神経生理学的に）具体的に明らかになる可能性はある。そのような場合には、もはや、「動機一般」を含む行為の記述が問題にされることはなく、メディア暴力とその影響で行使された暴力行為との間に成立する因果関係がもつばら問題にされることになるだろう。
 - * 19 次を参照のこと。Bushman, B. J. & Huesmann, L. R., 'Effects of Televised Violence on Aggression', in Singer, D. G. & Singer J. L. (ed.), "Handbook of Children and the Media", Saga Publications, 2000, pp.232-236.